

年 頭 の こ と ば

農林水産省農林水産技術会議事務局長 川嶋良一

昭和56年の年頭にあたり、植調ならび関係の皆さんに心から新年のご挨拶を申し上げます。

植調の皆さんにとっては、昨年は立派な会館ができ、創立30周年のお祝いを盛大に行なうなど、記念すべき年であったことと思います。これまでの関係者のご努力に心から敬意を表し、衷心からお祝いを申し上げます。

本年は30年の一世代につづく新しい世代を創造する最初の年として、今後の飛躍のための第一歩を大きく踏みだされるよう、期待をし祈念をいたしたいと思います。30年の一世代を立派に発展の歴史として築きあげられた植調にとって、新世代もさらにさらに発展の歴史となることを信じて疑わないところであります。

* * * * *

わが国の農業は戦後急速に回復し、発展をして参りました。昭和31年には、もはや戦後ではない、といわれるほどになり、昭和30年には水稻の反収がいきに400 kg ちかくまで向上しました。それまでは、昭和8年の345 kg を長い間しのぐことができませんでしたが、その後は昭和35年に400 kg、42年に450 kg を突破し、ついに45年からは米が過剰となって他作物への転作を余儀なくされるにいたりしました。豊葦原の瑞穂国も、ついにお米が余って困ってしまうようになったわけで、ここで我が国の農業も一大転換をせまられることになった次第です。米の消費が減退したことも大きな原因とはい

え、常時1,400万tonのお米がとれる力をつけたということは、我が国の稲作技術の進歩が米の過剰という形ではねかえてきたわけで、技術の進歩というものがもつ文明史的な意味を教えてくれたような気がします。昭和36年の農業基本法以来、稲作ばなれで園芸・畜産などの選択的拡大が大いにさげられたのですが、結局は稲ばなれができず、いまや米も蜜柑も牛乳も過剰に悩むようになってしまいました。

このことは、技術の進歩がもつ文明史的な意味を十分かみしめ、それに十分な配慮と対策をしなければ、どういう結果になるかということを経験として受けとめておく必要があることを教えているようです。最近一部に、エサ米問題がにぎやかにとりざたされております。米の需給均衡をはかるために水田利用再編対策が実施され、昭和53～55年の第一期につづいて、56～58の3年間を第二期として実施することにしております。第二期は、第一期よりも転作面積が大幅にふえることになっております。

ところが、転作作物としては、麦・大豆・飼料作物などを奨励しているのですが、湿田などではこれらの作物は作りにくい。また、収量性も低くて経営上もなかなか定着しにくい。そこで、湿田でも栽培しやすいエサ用の水稻を転作作物としてとりいれたらどうかという主張が行なわれております。一方で、我が国は世界一の農産物の輸入国であり、なかでもエサ用の穀物

の輸入は莫大なもので、我が国のエサ用の穀物はほとんど輸入に頼っていることは周知のところであります。これをエサ米をつくることでいくらかでも軽減できれば、大変意味があることではないかということも、その主張を助けております。

さらに、昨年は大冷害のために100万tonもの新米が不足しそうです。幸いに過剰米が多量に残っているので、古米を食べればよいのですが、こうしたことがつづいたら大変なことになります。昨年はアメリカでは大熱波の被害があり、ソ連・韓国・中国などでも不作でした。石油もそうですが、食糧の小麦やエサのトウモロコシなどが輸入できなくなったらどうなるのか。国の安全保障の面からみても、エサの確保はもとより、いつでも食用の稲にきりかえられるエサ用の水稻をつくることは、当面の問題だけでなく、将来の我が国の安全のためにも極めて重要であるということになります。

それに、どの文明先進国でも、主食の生産力が高まれば余ったぶんだけはエサにまわしてきている。小麦でもバレイショでもトウモロコシでも、主食専用というものはすでになく、主食とエサは代替性をもっているのが普通であるのに、米だけを別だと思えるのは文明の進歩を知らないものではないかというのが最後のとどめです。現実に我が国でも結果的にではあるけれども、過剰米をエサ用に政府が売却しているではないか、というところでオチになります。

エサ米についての以上の論点は、私なども全く同感であるし、そのための技術開発のために努力もしてきました。最初の減反時代からそんなことを考えていたこともあって、昭和49年には青森農試で試験をはじめました。技術会議でも54年から全国的に本格的なとりくみをはじめ

ました。しかし、いままでは稲作の研究が食味に重点をおいてきましたので、エサ用は品種も栽培法もほとんどありません。文明史的に大転換期ですから、それなりの時間がかかります。

ところが、一部にはイタリアの品種などをもてはやして、いますぐにでもエサ米をつくることができ、しかも採算にあうようなことを宣伝している人たちがいます。技術の進歩がないのに、そんなことがすぐ出来るわけがありません。それは、米の過剰のように、技術が進歩するとそれがある時点で文明史的な転換を余儀なくされるものであることを無視すると同様に、賢いことではありません。技術についての適切な認識がないと、技術を正しく活かすことができないこと具体例として、最近問題となっているエサ米について、少しくどくどと書きすぎたようですが、要するに、科学的な技術の積み重ねと文明史的な物の見方とが車の両輪のようにバランスがとれていなければ、どこかで足もとが狂ってしまうということを強調したいのです。

戦後の稲作の進歩とともに、というよりも稲作技術の進歩を支えて、すばらしい発展をとげてきた除草剤を中心とした除草技術についても、同じことがいえるのではないのでしょうか。物事を一面的に、あるいは内側にいてみると、他の面や外部からの問題に気がつかないことが多いものです。ここまで発展してきた除草(剤)技術も、その科学技術的な進歩がすばらしいだけに、農業あるいは農業の技術開発のなかでの文明史的な発展の方向を検討してみる時期にきているかもしれません。30年という一世代の区切りにあたって、それぞれの身の廻りで考えてみることも意味のあることではないのでしょうか。植調の新しい世代が、さらに大きく発展するためにも必要なことではないかと思います。